まさに混沌の学校生活

藤龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まさに混沌の学校生活

【Ｎコード】
Ｎ３３９４Ｚ

【作者名】
藤龍

【あらすじ】
異郷の地に越してきた俺、天羅新人は「世紀末混沌学校」という学校に転校することになった！　どんな学校か楽しみでしょうがなかったのに……！！
生徒も先生もみんなどっかずれてるし、警備員は人の話し聞かないし、挙句の果てに校長はもうとんでもないし！！
それでもなんだか楽しい……そんな俺の学校生活を、送ります！

第一話　俺、いきなり不審者！？（前書き）

どうも、初めての方は初めまして。藤龍です。
いきなりとんでもない内容になっていますが、お付き合いいただければ幸いです。

第一話　俺、いきなり不審者！？

見慣れぬ地、見慣れぬ建物、見慣れぬ空。

俺、天羅新人（てんらニイト）は何もかもが見慣れぬ地を歩いている。

なぜ歩いてるのかって？　それはすぐにわかるだろう。

歩き続けると、今までよりも大きな建物についた。

その門には『世紀末混沌学校』と書かれている。

な、わかっただろ？

俺は今日から、この学校で勉強するのだ！！

「おっしゃあ！！　たどり着いたぜ世紀末混沌学校！！！！」

俺は思い切り叫んだ、叫んだ、叫んだ！！

「……あんた、こんな朝っぱらから何騒いでんだよ」

「へ？」

俺は黒っぽい服を身にまとった人に話しかけられた。

「どうしましたぁ、土方サン」

「おう、不審者だ」

「いきなり不審者呼ばわり！？」

「じゃあ、三枚におろしますかね？」

「いや、その前に拷問部屋だ」

「いやいやいやなんでそうなるんですか人の話し聞いてください俺はただたんにここに転校してきたもので今日は珍しく早起きしちまったんでもういてもたってもいられず学校まで歩いてきました何ゆえそういうゴホッ！」

息吸うの忘れてた！

「だ、そうだ」

「つまりコイツはこれからここに来る予定の転校生の追っかけで、本来なら時間通りに動く予定だったがいてもたってもいられずにこんな時間に行動に出たわけですね」

「だからなんでそうなる！！　さっきの説明をどうやったらそんな感じになるんだよ！！」

「でもいくらなんでも朝５時ってのは早すぎだろ」

「ちなみに正確には朝４時５３分でっせ」

ええ早すぎですよ、それくらい自分でもわかってますよ！

その時

ピリリリリッピリリリリッ♪

最初の男性が携帯を開いた。なんで待ちうけがマヨネーズ！？

「はい、土方です。　はい、はい、了解しました。　その代わり今度マヨネーズ一年分お願いします」

一年分！！？

ピッ♪

「よし、逝け」

「何でそっちなんですか！　て、行っていいんですか、俺の疑い晴れたんですか！？」

「校長が直々に判決を下したいんだと」

判決って何！！？

そんなこんなで俺はようやく校舎に入ることができた。

そして校長室にお邪魔した。

……で、

「何で入ってきて早々、柱に縛り付けられてるんだよ俺！！」

そう、俺は校長と思しき人の手によって柱に縛り付けられたのである。

「いやぁ、だってキミ、うちの秘書の追っかけでしょ？」

……は？

「僕の秘書の東風谷早苗（こちやさなえ）は最近ストーカーに悩まされていてね。キミだろ？」

いや知らないって！！

「ははは、隠さなくてもいいよ。　彼女は人気だからね」

ああ、もうなんか不審者からストーカーに成り上がっちゃったよ。

「ま、いいわけがあるんなら聞くけど？」

「じゃ、言い訳させてください」

俺は言い訳をした。

３０分後、ようやく話がまとまった。

「う～ん、でもおかしいな。　天羅新人なんて人は来る予定がないよ？」

「へ？」

「うん、今日来る予定なのは『テラニート』って人だけだ」

「テラニート……」

このとき、俺の頭の中で超複雑な数式が浮かんだ。

天羅新人（てんらニイト）→てんらニート→テラニート

……

「ふざけんじゃねえ！！」

「ゴフッ！！」

俺はロープを気合で引きちぎり、校長（？）に蹴りを喰らわせた。

「どうしてそう聞き間違える！！　なんで俺がテラニート呼ばわりされなきゃいけない！！　そりゃ学生はほとんどの割合でニートだよ、ええ！！？」

「ぼ、僕を蹴るとは……そんな人間はキミが1億回目だ、おめでとう」

「一億回も蹴られたのかよ！！」

「いや、殴りチョップ首絞め刺し燃やし電撃射撃氷結転落圧迫など全部含めたら一兆越える」

「越えるのかよ！！　ていうかあんたそんだけやられて生きてるって何者だよ！！」

「……良くぞ聞いてくれた！！」

すると校長（？）はものすごい勢いで立ち上がった。

あれ、なんか周りが暗くなってこいつにスポットライトあたってるんですけど？

「我こそはここ、『世紀末混沌学校』の校長、藤原龍玄宗略して藤龍！！　四十年前からこの学校を創り、以後ずっっっっっと校長を務め上げてきた、まさに不死身！　無敵！　敵無し！」

「四十年前からってお前何歳だよ見た目俺と変わらねえじゃんか！！　それから不死身も無敵も敵無しもどれも意味同じじゃねえか！！」

ちなみに俺は１５歳だ。

「ああ、僕は今５５歳だ」

「……はぁ！？」

「高校に受からず職も見つからない。　もう人生に絶望して自殺しようとして川に身を投げたその時……！」

なんか語りだしちゃったよこの人！！

「その時……！！」

「その時……なんだよ？」

「その時……」

「だから言うんなら早く言え！！」

「……気づいたらこの学校を創っていた」

……え？　まさかの無意識で作っちゃいました～的なノリ？
ていうかさっきから「作る」じゃなくて「創る」になってんだけど？

「いや、字はあっている。　なんかよく分からないが、魔法で創り上げてしまったらしい」

「……なあ、話元に戻していいか？」

「？」

「もともと俺がここに転校することについての話だったのにどうしてここまで脱線したんだよ」

「それはキミが僕を蹴ったからであって……」

藤龍はそう念を押すと、コホンと咳払いをしてから言った。

「じゃあ、本題だ。　教室解放まではあと一時間半ある。　そこにあるベッドで休んでるといい」

藤龍は隠し扉みたいなのを開いてその中にあるベッドを指差した。

「……起きたらどうすりゃいいとか教えてくれないのか？」

「起きたらでいいだろう。　とりあえず、寝ろ！　後がもたなくなるぞ！！」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

俺は部屋に入り、ベッドに潜った。

扉は藤龍が閉めた。

……

……なんでこの部屋の扉、隠し扉みたいだったんだ？

俺は部屋の中を探ってみた。

タンスなどはない。　あるのはベッドと洗面器だけだ。

俺はベッドの下に手を突っ込んでみた。

……何かある、本？

これってまさかと思うけどよ……あれか？　思春期男子がほとんどの割合でベッドの下に隠していると言われるアレか？

もしもアレだったら、あのやばそうな校長、クビにできるな。

俺はそれを取り出した。

それはいくつものリングでページが留められている（写真保管するのによく使うやつ）ものだった。

題名は……「早苗さまサイコー！」

早苗って確か藤龍曰くやつの秘書……だっけ？

俺はページをめくってみた。

……

……

……わかったよ、ストーカーの正体。

俺はそれをカバンに入れ、ベッドに潜り直し、夢の中へ……。

おやすみ。

第一話　俺、いきなり不審者！？（後書き）

次回、テラニートがクラスに行きます！
ニ「テラニートじゃねえ！！」
はいはい。
ニ「それからお前……ありゃなんだよ！」
は？
ニ「お前のベッドの下！」
……ああ、それは誤解だよニート。あれは俺ではなくて藤原龍玄宗なのだから。
ニ「……お前の名前は？」
ん～、本名？
ニ「おう」
言うかボケ！！ではまた次回～。
ニ「言え！！疑い晴れねえぞ！！」

第二話　俺、転校生！（前書き）

いきなり滅茶苦茶です。

第二話　俺、転校生！

朝7時2分に俺は目を覚ました。

俺はベッドから降り、軽く背伸びしてから扉を開けた。

そこには、案の定藤龍がいた。

「お、目が覚めた？」

「ああ、ありがとな。　……で、俺の教室ってどうなる？」

俺は例のブツについて触れないように話した。

「ああ、それだったら3階のA組だ」

「……そこに行くだけでいいのか？」

「ああ。　あとは担任の……誰だっけ？の指示に従ってくれ」

……教員の名前を忘れるとか、もうこいつクビでいいよ。

俺は校長室を出て、3階のA組に向かった（ちなみに校長室は1階）。

俺はA組の教室の前にたどり着いた。

すっげえ緊張する……。

「え～では今日はまず……転校生を紹介します」

教室内から若い男性の声が聞こえた。

ザワザワザワザワ

ああ、マジで緊張する。　こんな時はドラクエXのグチでも考えるか。（注：ここから先のグチは作者の感情です。ニートは関係ありません。というか世界観的に関係なくしたいです）

……なんでドラクエがオンラインゲームなんだよ！！　なんだよあのキャラクター！！　別に主人公が人間じゃないのはいいんだけど人間の戦闘キャラも出せよ！！　それになんで戦闘システムがFFなんだよ！！　しかも噂では定期課金だと！！？

絶望した、ス●エニに絶望した！！（ここからニートに戻ります。ありがとうございました）

「こら、転校生！　ドラクエのグチ考えてないでさっさと入れ！」

先生が教室から顔を出して言った。　て、心読んだ！？

「エフン！　サーセン」

俺は一言謝ると、教室に入り、教卓の前に立った。

ああ、みんなの視線が痛い……。

恐らく先生の言葉を聞いたのだろう。　このままじゃ俺は痛い子確定だ。

俺は顔を上げた。

「え～、今日からここで皆さんと一緒に勉強することになった天羅新人です。　これからよろしくお願いします」

俺は挨拶を簡潔にした。　拍手が起きた。

「え～と、じゃあ天羅はそこに座ってくれ」

先生が指差した場所は、水色の長い髪で白い帽子を被り、白い服を来た女の子の隣の席……簡単に言うと窓際一番後ろ。

俺は指示された席まで移動した。

「私はイカ娘でゲソ！　テラニートよ、これからよろしくでゲソ！」

「イカ娘って……それ本名？」

キーンコーンカーンコーン

そんな俺の疑問を他所に、チャイムが鳴った。

「にしてもよくこの学校に来たな……」

クラスメイトの一人、阿久野ジローが言った。

ていうかいつの間にか俺の周りに集まってるし！！

「まあ、それは置いといて……どういう意味だ、それ？」

「……何も知らずに来たのか？」

そう言ったのは青髪の少年、ラハール。

「ああ、まあそんな感じ」

俺はそう答えた。

実際、ここまで散歩できたことはあっても校内見学はしたことがない。　さらにサイトやパンフレットもないので、知りようがないのだ。

「……しょうがない。　教えるか」

青いヘッドホンをつけた少年、桜庭ネクはそう言って席を立った。

え、なんでクラスメイトの名前が分かるのかって？　写真つきの名簿見て覚えた。

まあ、イカ娘は本名かどうか怪しかったんで……。

「おい、言うのか？」

「あとで事実を知ったらショックがでかい。　ならば今言うべき

だ」

「おいおいおい」

周りが一気にざわついた。　なんだ、そんなにひどいのか？

「ああ、ひどいってもんじゃない。　この学校に来たら最期、大学に進学できない上に就職も厳しい」

……え。

「この学校は小中高ごちゃまぜ。　それはまだいいんだが、授業が一ヶ月に一度あるかないか。　それに……なあ？」

「そうだな。　確かにイベントが多すぎる」

ネクに続けて、ラハールが言った。

「イベント……？」

イカ娘「そうでゲソ！　最近で言えば明日から金曜まで『デュエル大会』が開催されるでゲソ！」

「デュ、デュエルってDM（デュエルモンスターズ）！？」

ジロー「そう。　しかもデッキ持ってるやつ強制参加」

「マジで！？　俺デッキ持ってるんだけど！！」

ラハール「じゃあ、参加だな！！」

ネク「俺なんて無理やり作らされたよ……」

「ま、まあでも、大丈夫だと思いますよ？」

そう言ったのは黒髪長髪の女顔だが男の鬼神レイ。

「いや、全然大丈夫じゃないって！！　この大会で毎度のように救急車来てますから！！」

微妙な突っ込み、ありがとう。　「ダメガネ」こと志村新八。

「て、救急車！？　デュエルでけが人出るの！！？」

新八「まあ、モードにもよるんだけど……」

「モード？」

レイ「この学校のデュエルには三つのモードがありまして、一つがデュエルディスクを使用した『ノーマル』。　もう一つがDホイールを使用した『ライディング』。　そして最後が問題の……」

ネク「……『闇のゲーム』だ」

闇の……ゲーム？

ラハール「このモードでデュエルすると、バーチャルの痛みが現実のモノになってしまうのだ！！」

「なんて恐ろしいシステム！　てかそんなモードでやる人いるの

！？」

ジロー「それが……いるんだよなぁ……」

レイ「ええ、いますよね。　生徒から約５人、警備員から１人」

警備員も参加！！？

ネク「それも困ったことに、全員凄腕」

「マジで！？」

イカ娘「そいつらに当たったら運のツキでゲソ！」

「そのモードって……固定？」

ネク「それは違うな。　モードは試合毎に決まる。　決める権利があるのは前の試合でのＬＰ（ライフポイント）が多いやつだ」

ジロー「でも、やつら全員ほとんどの割合でノーダメだぜ？」

俺はかなり唖然とした。　ていうかもうこの学校自体やばくないか？

ラハール「それから、もう授業ねえから家帰ってデッキ調整しておけ」

授業なし！！？

ネク「イベント前だからな。　それを理由に今日休んだやつも結

構いる」

……確かに、今話している連中以外いない。

「じゃあ、そうしよっかな」

俺は立ち上がり、バッグを持った。

ジロー「明日はデッキとデュエルディスクだけでいい。　……ディスク持ってるか？」

「ああ、大丈夫だ問題ない」

新八「では、また明日」

イカ娘「また明日でゲソ～！」

俺はクラスメイトに見送られ、学校を出て家に向かった。

……この学校、ホントやばくないか？

もはや学校として成り立っていねえんじゃ……！！

大学進学もできないといっていた、就職も難しい。

……なんで俺、何の情報もなしにこの学校に来たんだろう。

いまさらながら後悔した。

第二話　俺、転校生！（後書き）

次回、いきなりの展開でデュエル大会です！
ニ「まさか全員の試合やるつもりか！？」
いや、予定としてはテラニートの試合のみで行こうと思います。まあ、要望があれば話しは別ですが。
ニ「・・・それから、急展開過ぎないか！？」
サーセン、どうしてもデュエルやりたかったんで。
ニ「ニコ動の架空デュエルに影響されすぎだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3394z/

まさに混沌の学校生活

2011年12月17日23時53分発行